

「学びに向かう力」の育成～「主体的な学び」へ導く学習指導の工夫～

平成30年度 大津町小中学校共通実践事項

(1)話し手に体を向けて聞く (2)「めあて」と「まとめ」の明示 (3)家庭学習の習慣

9月4日(水)

徳淵

7月17日(水) 中研 6年2組 理科 倉田先生 単元名：生物どうしの関わり

倉田先生には、校内研の国語・算数を中心に提案した視点が、理科の学習でも生かせるかを提案していただきました。

本時は単元のまとめにあたる学習でした。めあては、「ミツバチはくらしに必要なのだろうか」で提示されました。このめあてに対して、児童に、「必要だ」「必要ない」「どちらともいえない」の3つから選択させ、その理由を問われました。導入時点で、A：必要だ（多数）、B：必要ない（2名）、C：どちらともいえない（4名）で分化しました。

展開部分で、それぞれの立場の意見をまとめられました。

A→・ハチを食べている動物もいる。 ・ミツバチが受粉の役に立っている。
・薬になることもある。

B→・ミツバチがいなくても、人は生きていけるから。 ・さされたら、痛いから

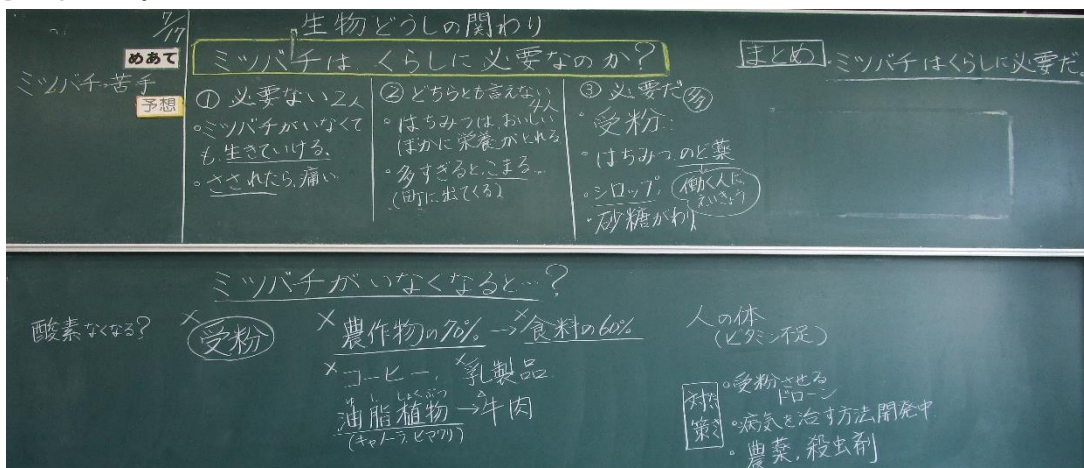
C→・多過ぎると、人間も困る。 ・ハチミツの栄養は他でも取れる

ここで、授業者から、次のような問いかけがありました。「もしも、ミツバチがいなくなったら…」を考えてみましょう。この問いかけに児童は、次のように答えました。

「酸素がなくなる→受粉してくれる役割がいなくなると植物が育たなくなるから。」

そして、ミツバチに関する資料（動画）が提示され、ミツバチが必要であることについてさらに科学的理解を深められました。

終末は、「ミツバチはくらしに必要な。なぜなら・・・」とされ、「・・・」の部分は児童に個々でまとめさせました。



本時のポイントは、A・B・Cの3つを選択させ、立場を明確にさせたことだと思います。特にB・Cを最初に選んだ児童にとって、本時は科学的な見方・考え方を深めた貴重な1時間だったと思います。本校研究の「思考のズレを生む導入の工夫」や「問題解決型のめあて」が理科の学習でも生かせることが検証できました。倉田先生、ありがとうございました。